

東京外国語大学大学院国際日本学研究院主催ワークショップ「アーカイブとしての戦前 SP 盤——日本伝統文化振興財団との協働事業報告」

友常勉

(東京外国語大学大学院国際日本学研究院)

I はじめに

このワークショップは、本学大学院国際日本学研究院のアーカイブ事業の一環に位置づけられた、戦前 SP 盤の総合カタログ構築事業の報告としておこなわれた。これは公益財団法人日本伝統文化振興財団と本研究院との協働事業である。

歴史的音源としての戦前 SP 盤のアーカイブ化事業は、国立国会図書館を中心に 2007 年から開始された事業に端を発している。国立国会図書館の「歴史的音源」のページには以下の説明がある。「平成 19 (2007) 年、歴史的・文化的資産である初期のレコード (SP 盤) 及び原盤の劣化、散逸等による音源の喪失を防ぐため、日本放送協会 (NHK)、社団法人日本音楽著作権協会 (JASRAC)、社団法人日本芸能実演家団体協議会 (芸団協)、財団法人日本伝統文化振興財団、特定非営利活動法人映像産業振興機構 (VIPO) 及び一般社団法人日本レコード協会 (RIAJ) の 6 団体が参加して歴史的音盤アーカイブ推進協議会 (HiRAC) が設立されました (名称は当時)。そして、1900 年初頭から 1950 年頃までに国内で製造された SP 盤及び金属原盤等に収録された音楽・演説等、約 5 万の音源のデジタル化を開始しました。／当館は、これらの貴重な音源を広く国民に公開するため平成 23 年 5 月から歴史的音源の提供を始め、平成 25 年 9 月までに全音源約 5 万点を公開しました」

(<http://rekion.dl.ndl.go.jp/ja/aboutRekion.html>)。

歴史的音盤アーカイブ推進協議会 (Historical Record Archive Promotion Conference = HiRAC) の設立に大きな役割を担った藤本草氏 (日本伝統文化振興財団理事長) は、SP 盤に吹き込まれた「音」が一世紀から半世紀にかけて存在した生きた記録であり、将来にわたる音文化の資料としての意義を有することを指摘している (同上)。生きた文化や生活を知る＝聞くことのできるこのアーカイブは、音文化であると同時に録音文化の資料でもある。これは 1900 年初頭から 1950 年ごろまで、大隈重信や星亨などの歴史的人物の演説、方言、歌唱、植民地での民族・民俗音楽、伝統芸能など約 5 万の音源がデジタル化されている。これらの音源は、言語学はもちろん、文化研究、歴史研究にわたる広汎な研究を、その相貌も大きく変えながら可能にすることが期待される。すでに国立国語研究所の相澤正夫氏を中心に、『SP 盤演説レコードが開く日本語研究』 (笠間書房、2016 年) としてその成果は公表されつつある。

II 本学大学院国際日本学研究院と日本伝統文化振興財団との協働事業

東京外国語大学国際日本学研究院「戦前 SP 盤総合カタログ構築プロジェクト」は、2016年度から開始された。歴史的音源のメタデータのリソースとなったものに、ビクターが作成し、日本伝統文化振興財団が保持している音源目録のデジタルデータおよび「手書きデータ」約 23000 件がある。このデジタルデータおよび手書きデータのすべては、国会図書館の歴史的音源の公開資料に含まれていない。そこでこのアーカイブ事業では、財団が保管する「手書きデータ」について、これをデジタルデータ・国会図書館歴史的音源と照らし合わせ、データを入力しデジタル化し、ローマ字表記化するとともに、他のソースから得られる音源・書誌情報のメタデータを可能な限り書き加え、現物の有無と所在調査をおこない、総合カタログ化することにあつた。

なお、この事業開始時に作成された概要は以下の通りであつた。

1. 目的：

本プロジェクトは、戦前の歴史的音源のメタデータ作成による総合カタログ構築を目的とする。ビクター（現株式会社 JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント。以下「ビクター」）盤を端緒として、将来的には、現存する他のレコード会社および消滅したレコードレーベルの音源を含めた総合的、網羅的なデータベース化を目指す。

いわゆる歴史的音源は、すでに国会図書館に 48732 件がデジタル化されている。このうちビクターが提供した歴史的音源のメタデータのリソースとなったものに、ビクターが作成し公益財団法人日本伝統文化振興財団（以下「財団」）が保持している音源目録のデジタルデータおよび「手書きデータ」約 23000 件がある。このデジタルデータおよび手書きデータのすべては、国会図書館の歴史的音源の公開資料に含まれていない。（いいかえれば、国会図書館の歴史的音源はデジタル化可能な音源とメタデータの一部ということになる）

本プロジェクトは、財団が保管する「手書きデータ」について、これをデジタルデータ・国会図書館歴史的音源と照らし合わせ、データを入力しデジタル化し、ローマ字表記化するとともに、他のソースから得られる音源・書誌情報のメタデータを可能な限り書き加え、現物の有無と所在調査をおこない、総合カタログ化することにある。

2. 歴史的音源の内容：

このプロジェクトが対象とする戦前 SP 盤に録音された歴史的音源とは、1930 年代前半に集中しており、民謡・新民謡・里謡・浪花節・流行歌・童謡・独唱歌・応援歌、演説、映画解説など多岐にわたる。そのなかには植民地化にともなう、植民地の各地で収録された「大東亜音楽集成」も含まれる。伝統音楽においては戦前の名人たちによる演奏・歌唱、さらにいまは聞くことができない各地の民謡や里謡、音声が収録されてい

る。いずれも伝統芸能・日本語研究・1920年代30年代文化史研究上の第一級資料である。

3. このプロジェクトによって見込まれる成果:

歴史的音源の総合カタログにおける、現物の所在や正確な音源情報とそのローマ字化によって、国内外の利用に供する画期的なデジタルリソースを構築することができる。

音源資料の流出や喪失を防ぎ、音楽史・文化史・録音史の研究の基本資料とする。

4. プロジェクトに必要な作業:

既存のデータと「手書きデータ」(約23000件)の照合、音源情報調査、これらにもとづく入力作業。

5. プロジェクト遂行にあたっての機関との協力:

音源目録の作成者である株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメントおよび音源目録の整備をおこない目録管理の人的資源・ネットワークを有する公益財団法人日本伝統文化振興財団との協力にもとづく。また、本件実施に当たっては、SP音源のアーカイブ事業を目的に2007年に設立され、2014年3月末に解散した歴史的音盤アーカイブ推進協議会(社団法人日本音楽著作権協会(JASRAC)、社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)、社団法人日本レコード協会(RIAJ)、公益財団法人日本伝統文化振興財団の4団体から成る)の構成団体および2011年から音源の公開をおこなっている国立国会図書館と連携しながら推進する。

以上

III 現在までの実績

2018年3月までで、「既存のデータと「手書きデータ」(約23000件)の照合、音源情報調査、これらにもとづく入力作業」は基本的に終了した。現在はその成果の公開にむけて調整中である。

IV ワークショップについて

2018年3月9日に開催されたワークショップでは、藤本草氏(日本伝統文化振興財団理事長)、大野寿子氏(日本伝統文化振興財団専務理事)、市橋雄二氏(株式会社JVCケンウッド・ビクターエンタテインメント)の三氏から、SP盤アーカイブ化までの歴史とその意義についてのご報告をいただいた。藤本氏からは上記の歴史的音盤アーカイブ推進協議会(HiRAC)設立までの経緯、音文化・録音文化の結晶としてのSP盤の意義が説明された。

大野氏は日本伝統文化振興財団の活動の概要と歴史について報告された。市橋氏は音源メタデータの活用の方策として、研究者や利用者各自が多様な切り口による検索項目を設定することで、研究目的に応じたアーカイブ集合の構築が可能となること、それによって自前のアーカイブができあがることが示された。

V おわりに

歴史的音源アーカイブの意義は十分に理解されるとしても、その活用はまだ始まったばかりである。その際、総合カタログの充実、利用可能な歴史的音源の所在と内容、全貌を情報化する意義がある。それによって研究目的でのアクセスが容易になり、計画的かつ組織的な調査研究が可能となるだろう。言語研究・教育を基盤として人文社会学や地域研究を展開している本学にとって、このアーカイブの意義は大きい。アーカイブの充実と公開にむけて、これからの事業を進めていきたい。